

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：62608

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12355

研究課題名(和文) 説話に見られる日中動物観の比較研究 『太平広記』と『夷堅志』、『夷堅志和解』

研究課題名(英文) A Comparative Study on Japanese-Chinese Animal Views Seen in Narratives : "Taiping Guangji", "Yi jian Zhi" and "Ikenshi Wage"

研究代表者

黄 イク (HUANG, Yu)

国文学研究資料館・研究部・特任助教

研究者番号：10814808

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は中国南宋時代の志怪小説集『夷堅志』に見られる動物関連の説話を選出し分析した上、北宋までの説話を集めた官撰小説集『太平広記』の動物説話と比較研究を行うことで、『夷堅志』説話の世俗的な特徴を確認し、宋代以前の志怪小説に見られる、いわゆる「物老為怪」型説話の減少は、人間と怪異の均衡が崩れ、人間の力が怪異の力に及ばなくなってきたことの表明であると指摘した。さらに、『夷堅志』に見られる疫病鬼神に関する説話が明代の類書や『夷堅志』の和訳本『夷堅志和解』を通して、江戸時代の文学、医学関連資料および民間信仰などに広く影響を与えた事例を考察し、日本における『夷堅志』説話受容の様相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は『夷堅志』動物説話の抽出・整理作業を行い、動物観・自然観という文化史的視点を導入し、比較説話学の方法を用いて日本における本書の受容を考察したことを通して、中国の知識が日本に伝わり、日本化する多層的な過程を例示した。特に、『夷堅志』説話の世俗性と怪異性をめぐって、人間と怪異の力の消長という視点で捉え直すことで、六朝期から宋代までの生物に対する認識の変化を読み取ることができる。また、本書に記録された疫病鬼神の描写を分析することは、当時の人々が行った疫病流行中の不可解・不条理な現象に対する解釈の心理の究明につながり、パンデミックに直面している現代社会に先人の知恵と教訓を提供することができる。

研究成果の概要(英文)：This research investigated animal-related narratives in "Yi jian zhi," a collection of Zhiguai xiaoshuo from the Southern Song Dynasty, and compared them with narratives from "Taiping Guangji," a collection of narratives up to the Northern Song Dynasty. By conducting research, we confirmed that the narratives in "Yi jian zhi" have worldly characteristics and highlighted the decrease in the so-called "Wu lao wei guai" (when things get old, they make strange matters) type narratives seen in pre-Song dynasty Zhiguai xiaoshuo expressed that the power of humans had collapsed and was no longer comparable to the power of mystery. In addition, this study determined that a narrative about the plague demons and gods depicted in "Yi jian zhi" had a significant impact on literature, medical literatures, and folk religions during the Edo period via a Ming Dynasty Leishu and the Japanese translation of "Yi jian zhi", and clarified a portion of the acceptance of "Yi jian zhi" narratives in Japan.

研究分野：文学一般

キーワード：夷堅志 太平広記 夷堅志和解 動物説話 自然観 瘟疫鬼神 行疫 怪異

1. 研究開始当初の背景

『夷堅志』は南宋の政治家・学者である洪邁(1123~1202年)が約60年間にわたって編纂した大部の志怪小説集であり、作者自身の体験談や家族、親戚、同僚、友人が提供した見聞譚を収録した、宋代の庶民生活・社会実態を伝える資料の宝庫と言える。それに対して、同じ宋代の大型小説集としてよく『夷堅志』と比較される『太平広記』は、北宋(960~1127年)太宗の勅命によって編纂された官撰小説集であり、漢代から宋初までの説話を集めた500巻の大型の類書型小説集である。

中国においては長い間、宋代の小説に対する文学的評価が高くなかったため、『夷堅志』も学界で重要視されていなかったが、1990年代以降、『夷堅志』の研究が本格的に始まった。

本書の成立について、凌郁之「洪邁著作系年考証」(2000)などの論考が各志それぞれの成立時期を考察した。

本書のテキストについて、張元済『新校輯補夷堅志』(涵芬樓本)を底本とし、佚文を巻末に附した207巻からなる北京中華書局出版の点校本(1981)が出版されており、また、胡紹文「『夷堅志』版本研究」(2002)、張祝平「『夷堅志』的版本研究」(2003)などの論考がある。近年、地方誌・小説・筆記などほかの資料からの佚文収集作業が行われており、日本でも齋藤茂・田淵欣也・福田知可志・安田真穂・山口博子「『夷堅志』訳注 甲志上」~「『夷堅志』訳注 丙志上」(2014~2020)による詳細な訳注本が出版されている。

本書の思想内容や文学性および後世の影響に関する研究の中、特に本書の志怪性・教訓性・世俗性が注目され、作者洪邁の志怪を取り扱う意識や理学との齟齬などが議論されてきた。また、澤田瑞穂「宋代の神呪信仰 夷堅志の説話を中心として」(1980)を嚆矢として、宋代の宗教信仰・科挙官場・飲食住居・医療呪術といった様々な面で『夷堅志』の説話が社会研究の資料として活用されてきた。例えば、塩卓悟「唐宋時代の屠殺・肉食観 『太平広記』『夷堅志』を手掛かりに」(2007)、三田明弘「『夷堅志』『靖康の変』関連説話考」(2011)、伊原弘、静永健編『南宋の隠れたベストセラー「夷堅志」の世界』(2015)などの論考がある。

このように、両書の重要性が認識され、研究の基礎が固まりつつも、量の膨大さなどによるか、研究が十分に行われたとは言いがたいのが現状である。特に『夷堅志』は随時刊行する形式の書物であるため、部類別に整理されておらず、利用するには極めて不便である。

筆者はすでに『夷堅志』207巻のうち甲・乙志各20巻の動物説話を抽出・データ化してその特徴を分析する作業と、『太平広記』との比較作業を行ってきた。その成果を第134回和漢比較文学会例会(東部)(2017.1)と第10回和漢比較文学会特別例会(2017.8)において発表した。

『夷堅志』は官撰の史書からは読み取れない民衆生活の実態が生き生きと描かれており、特に動物関連の説話が多数含まれている。当時の社会における動物観・自然観を分析するために有効な資料である。本研究は社会・文化研究の資料として『夷堅志』の価値に注目し、動物説話を中心に『夷堅志』をとり纏わる日中文学史的な比較研究を行う。

2. 研究の目的

宋代は北宋の滅亡によって政治経済の中心が北方から南方へ移行し、文化面においても雅から俗へと庶民文化が興るなど、様々な面において中国文化史上大きな転換期である。本研究はこのような時代の社会様相をリアルに伝える資料である『夷堅志』を中心に検証することを通して、本書が記録した当時の動物に対する意識の異同・変遷とその文化的背景を文献に基づいて析出することが主要な目的である。

また、江戸時代に出版された『夷堅志』の和訳本である『夷堅志和解』(元禄3年(1690)序、貞享3年(1686)跋)を中心に、日本で『夷堅志』と『太平広記』両書の説話が受容された意図と説話が変容する様相を考察し、日本的動物観・自然観との比較研究を行う。

3. 研究の方法

『夷堅志』は今の中国の江西・福建・浙江などにあたる南方地域の記事が中心であり、地名と伝聞の出処(話題提供者の人名)を明記した説話も数多く見られる。本研究は『太平広記』と『夷堅志』における動物説話を種類別・地域別・時代別に抽出・整理し、データ化した上、両書に取り上げられた動物説話の特徴とその背景にある社会・文化の状況を比較分析した。

また、中国と日本における『夷堅志』と『太平広記』の受容史を辿り、特に近世の日本における『夷堅志』説話の受容と変容の実態を考察し、本書の説話が明代の類書や近世の和訳を通して、当時の文学、医学関連資料および民間信仰などに広く影響を与えたという、日本における『夷堅志』説話受容の様相を明らかにした。

研究成果は国内外の学会、学術誌で口頭発表、学術論文として公開した。

4. 研究成果

(1) 論文発表

- ・「『夷堅志』にける動物説話の特徴をめぐって」(『説話』13号、2019年3月)

『夷堅志』には動物関連の説話が多数含まれており、当時の社会における動物観・自然観を分析するために有効な資料である。同じ宋代に成立した小説集として、『夷堅志』は宋一代の説話を記録しているのに対して、北宋初期成立の『太平広記』は漢代から宋初までの書物からの説話を収録している。『太平広記』に見られる宋代以前の説話との比較分析は、『夷堅志』説話の特徴を究明することに繋がる。本論文は『夷堅志』に見られる動物関連の説話を抽出・整理し、『太平広記』と比較しながらその特徴について考察を試みた。その結果として、まずは『太平広記』に記録された動物の種類と説話の内容を比較分析することで『夷堅志』の世俗性が目立つことを確認した。つぎに、『夷堅志』の動物説話に見られる人事の吉凶と関わる内容の背景には北宋から南宋へと王朝が代替わりする際の不安定な政治状況が象徴的に表れていると考察した。さらに、『夷堅志』には『太平広記』に収録された宋代以前の志怪小説に見られる怪を為す動物を殺すことによって怪異が消滅する、いわゆる「物老為怪」型の説話が減少し、人間の力が怪異の力に及ばなくなり、怪異によって人は悲惨の死を遂げる事例が増えていることを指摘した。

・『夷堅志』に見られる疫病鬼神と日本における受容』（『国文学研究資料館紀要・文学研究篇』48号、2022年3月）

本論文はまず、『夷堅志』説話に見られる疫病鬼神のイメージと事例を整理し、それぞれの特徴を考察した。具体的には、本書に見られる疫病鬼神を人間の形象で登場するものと、動物の形象で現れるものに分類し、人間の形で登場する疫病鬼神は正と負のイメージを両方確認できるというように、多様な表象が見られるが、動物の形象で現れる疫病鬼神は、人間に災いをもたらす負の疫鬼が多いことを指摘した。さらに、『夷堅志』における疫病鬼神の説話の中、当地の土地神と交渉し、その土地に行疫する疫病鬼神を記す一群を取り上げ、疫病鬼神と土地神との攻防の様相、およびその深層的背景について考察した。このような描写が散見する背後には、当時の人々が行った、疫病流行中の不可解・不条理な現象に対する合理的な解釈を読み取ることができると分析した。

最後に、この疫病鬼神との攻防戦を記録した説話群の中の一話、その地に疫病を流行らせる疫鬼を奇妙な護符によって退治させたという異僧符説話（『夷堅乙志』巻5）が日本に伝わり、江戸時代の文学、医学関連資料および民間信仰など、ジャンルをわたり広く影響を与えた事例を分析した。この異僧符説話は明代の類書『群談採余』と『夷堅志』の和訳本『夷堅志和解』を通して、怪談や日記、医書、日用類書、浮世絵、石像など様々な形で江戸時代の文人と庶民の間で広まったという、日本における『夷堅志』説話の受容の一端を究明し、当時、中国の知識が日本に伝わる複雑で多層的な過程を例示した。

（2）口頭発表

・『夷堅志』における動物説話をめぐって』（和漢比較文学会第10回特別例会、2017年8月30日、（中国西安市）西北大学）

『夷堅志』を分類・選出した古いものに、南宋末頃の叶祖栄編纂の『分類夷堅志』がある。『夷堅志』から六百二十五話を選出して三十六門に分類し、動物説話を取り上げた禽獣門はさらに殺生悔過類、放生獲報類、殺生報応類、不食牛報類、靈性有義類、禽獣兎魚之異類、殺蚕報応類の七類に分けられている。この分類は本書とよく比較される『太平広記』といった先行の小説集の分類を継承しておらず、『夷堅志』の志怪性、教訓性と世俗性の特徴がよく表れた分類として評価できる。江戸時代の元禄頃に、桑門齊賢による『夷堅志』の和訳本である『夷堅志和解』が出版され、『夷堅志』の説話を抽出して二十九類に分類した。その中に動物関連の説話は、殺生悔過類、放生獲報類、殺生報応類、靈性有義類、欠債作畜類、貪謀報応類、禽獣為怪類、見怪不怪類、資材前定類、為善報応類、為悪報応類というように、『分類夷堅志』の分類基準を継承しつつも、異同増減が見られる。本発表は『夷堅志』『分類夷堅志』『夷堅志和解』の動物説話を取り上げ、その分類の特徴を考察した。

・「動物故事中的殺生与救贖 以『太平広記』、『夷堅志』為例」(中国仏教文学与文化国際学術研討会、2018年10月20日、(山梨県) 仏光山本栖寺)

『夷堅志』の動物説話に描かれた殺生と救いをめぐって、世俗性と怪異性という二つのキーワードに絞って分析した。人間は怪異に遭遇する時に不条理で悲惨な死を迎えるという「怪異殺人」の話が『夷堅志』に多く確認できるのに対して、『太平広記』に収録された宋代以前の志怪説話には、怪異が人力によって消滅される事例が少なからず記されており、このような怪異観の背景には、六朝期までの合理主義的な自然観が働いたと考察した。

・『太平広記』与『夷堅志』中的動物志怪故事 其世俗性与怪異性」(第6届叙事文学与文化国際学術研討会、2019年10月4日、台湾師範大学)

動物の怪異を中心に、『太平広記』に見られる「物老為怪」という年老いた動物が怪異をなし、怪を引き起こす動物を殺してしまえば怪異が治まる早期の志怪小説に見られる怪異観と、人間は怪異の力に勝つことができず、不条理で悲惨な死を遂げるという『夷堅志』に散見する怪異観を比較分析し、北宋から南宋へと王朝が代替わりする際の不安定な社会背景を合わせて考察した。

・「『夷堅志』における動物説話の特徴をめぐって」(総研大文化フォーラム 2019 境界を行き交う知、2019年12月1日、国文学研究資料館)

『夷堅志』と『太平広記』に記録された動物の種類と説話の内容を比較分析することによって、『夷堅志』の動物説話は世俗性が目立つことを確認した。例えば、本書甲志巻11に見える「松江鯉」という鱈が生き返る説話を取り上げ、この話型の中国と日本における変遷を辿り、「吳余鱈魚」という奇妙な形をしている魚の名前の由来とその形状を記録した『太平広記』の類話に比べて、『夷堅志』の「松江鯉」説話は鱈の形をしている「吳余鱈魚」の伝説が伝わる地域における説話の世俗化・一般化と見なすことができ、本書の世俗性を表した例として捉えることができると指摘した。また、『太平広記』の水族の部には珍奇な魚を記録する説話が多いのに対し、『夷堅志』は日常的に市場や食卓に見られる水族の類についての逸話がほとんどであると分析した。さらに、『夷堅志』において動物の異状が描かれた説話は人事の吉凶と関わるものが多い背景には、北宋から南宋へと王朝が代替わりする際の不安定な政治的状況が象徴的に表れていると結論付けた。

・「『夷堅志』瘟疫故事初論」(東亜文化交流史青年学者論壇、2020年12月11日、(台湾)国立清華大学華文文学研究所・中央研究院中国文哲研究所・オンライン)

『夷堅志』の医事説話に見られる瘟疫鬼神の描写を抽出・分析し、「行疫」と「逐疫」という疫病を引き起こすと、疫病を追い払う瘟疫鬼神の両義性およびその特徴と文化的背景を考察した。特に人間の疫病のみでなく、牛など家畜の疫病も疫鬼により引き起こされた例や、豚、猿、蛇など動物に化身した疫鬼の存在を指摘し、疫鬼の退治方法に関する記述を整理した。さらに、疫鬼退治説話の一例として『夷堅志』巻五「異僧符」説話の日本における受容を分析した。『夷堅志』の和訳本『夷堅志和解』、江戸前期的怪談小説『古今百物語評判』といった文学作品のみでなく、『麻疹養生伝』や麻疹絵、疱瘡絵、疫病除けの石像(山口県山口市仁保上郷、埼玉県秩父郡皆野町など)といった医学・民間信仰関連の資料にも異僧符をめぐるとの説話の影響が確認できることを考察した。

(3) 今後の展望

以上の研究を行う中、動物説話のひとつのパターンとして、動物の姿をしている疫病鬼神にまつわる言説の存在に気付いた。今後はこれを基礎に、疫病鬼神に関する中国と日本の言説、画像資料、民俗学資料を調査し、疫病文学における『夷堅志』の位置付けについて研究を進める予定である。

また本研究において、日本における『夷堅志』の受容史を考える際、類書および医学書の重要性が明らかになった。これらの成果を踏まえて、中国の志怪小説が類書という二次的資料を通して日本に伝わり、日本の医学知識の形成に寄与した事例を収集し、漢学、医学、文学が相互に影響しあう知の体系の見取り図を提示する、分野を跨がる新たな研究アプローチを試みる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 黄昱	4. 巻 13
2. 論文標題 『夷堅志』における動物説話の特徴をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 説話	6. 最初と最後の頁 110～121頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黄昱	4. 巻 48
2. 論文標題 『夷堅志』に見られる疫病鬼神と日本における受容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国文学研究資料館紀要 文学研究篇 = The Bulletin of The National Institute of Japanese Literature	6. 最初と最後の頁 131～166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24619/00004447	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 黄昱
2. 発表標題 『夷堅志』瘟疫故事初論
3. 学会等名 東亜文化交流史青年学者論壇（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黄昱
2. 発表標題 『太平広記』与『夷堅志』中的動物志怪故事 其世俗性与怪异性
3. 学会等名 第6届叙事文学与文化国际学术研讨会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黄昱
2. 発表標題 『夷堅志』における動物説話の特徴をめぐって
3. 学会等名 総研大文化フォーラム2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黄昱
2. 発表標題 動物故事中的殺生与救贖 以『太平広記』、『夷堅志』為例
3. 学会等名 中国仏教文学与文化国際学術研討会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黄昱
2. 発表標題 西施「艶遇」譚をめぐって 『太平広記』から朗詠古注まで
3. 学会等名 和漢比較文学会第11回特別例会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------